

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN

30 20 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

日本歲時記

秋



日本宋時記卷之五

秋

あり。後人せよ。其の中間  
をもと。ソウナリ。時事多き也。

卷之三

せうし

と心敏也

秋毫之微

史氏  
秋毫之微

逐少財の腰氣とやゆりを食油とす  
寒氣論よつまく夏の秋の初葉よりる事  
玉附衣とぬき裸して寒と貪るすすりれ五  
腕の膚完背に令ひまく人きてて扇毛りと  
風と取又衣多足と蟲せハ風背より入中風の  
氣くすむぬれこれとばへり坐かし寒りると  
坐へ八味散表もと服之二石と之は蔓葛  
月令度氣よつまく株ニ月收斂へて熟揚花體等  
五年ノ右うれ

換生湯よつまく秋氣を燐す宜く胡麻二升

て不代憲と洞と一

喜生湯によく寒氣と玉露草と喜生草の外  
疾氣癆瘍と至る散敷初め熱一粒の時若人  
これとくくに癆瘍と齧す事多すが來たる後  
食の風氣と熱いとどく又早霜の散敷せら  
骨一癆瘍と热い能脾胃とやゆり散敷二升  
病へよ敷き

月令度氣よつまく秋もまく老人穢足ノ散敷  
事と是の散敷と用多足をあゆみて大下

贊<sup>シテ</sup>一<sup>レ</sup>もうすをうれせうへくをゆりやまひとがん

小児もこらへく虫よぬ<sup>シテ</sup>す

振<sup>シテ</sup>滿よひそく株ハ弓矢をす水とのをきやうに

衣服と兵事<sup>シテ</sup>と

金賣二要累よひそく秋九十日食鹽の脚と食へり  
ま東極<sup>シテ</sup>づく古人の云秋薑と食すがうれへと  
高氣と宿<sup>シテ</sup>む脇店後縁みを又秋薑の  
五年と大いとア張乃イ豫よ邀<sup>シテ</sup>くそくに九月  
かかく薑と食て毒よアア眼と歎<sup>シテ</sup>あと後  
駆<sup>シテ</sup>かと滅<sup>シテ</sup>す

### 七月

立秋ハ七月の氣を割<sup>シテ</sup>穀ハ七月の中の七月の末を  
律と庚辰とア<sup>シテ</sup>七月八日和名と五月とソヘ  
是<sup>シテ</sup>五つ目ニヤ<sup>シテ</sup>と呼<sup>シ</sup>タ

### 六日休活

七月七夕と云又異姓<sup>シテ</sup>とひすま<sup>シテ</sup>難老蟲<sup>シテ</sup>はま

七月七日織女牽牛<sup>シテ</sup>假<sup>シテ</sup>金<sup>シテ</sup>乃<sup>シテ</sup>有<sup>シ</sup>あり

五<sup>シテ</sup>雞<sup>シテ</sup>よ元<sup>シテ</sup>織女牽牛の事<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>傳<sup>シテ</sup>祀<sup>シテ</sup>は娘<sup>シテ</sup>季<sup>シテ</sup>  
ク<sup>シテ</sup>言<sup>シテ</sup>とウケ<sup>シテ</sup>物<sup>シテ</sup>急<sup>シテ</sup>へ<sup>シテ</sup>無<sup>シテ</sup>援<sup>シテ</sup>の浪<sup>シテ</sup>術<sup>シテ</sup>と記<sup>シテ</sup>り<sup>シテ</sup>姑<sup>シテ</sup>  
き<sup>シテ</sup>婦<sup>シテ</sup>女<sup>シテ</sup>の嫁<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>家<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>子<sup>シテ</sup>可<sup>シ</sup>キ<sup>シテ</sup>丈<sup>シテ</sup>人<sup>シテ</sup>  
軍<sup>シテ</sup>士<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>帝<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>天<sup>シテ</sup>上<sup>シテ</sup>ノ列<sup>シテ</sup>官<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>御<sup>シテ</sup>蠻<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>  
駕<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>也<sup>シテ</sup>キ<sup>シテ</sup>亦<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>此<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>一<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>たり<sup>シテ</sup>と考

セトノ事小鹿獨りちつ庵一此事即ちもとち  
よ久くもあとありまほ何人を望むか  
ありかと云ふ事の解ひ一何げま  
所と申す所れども何れと云ふ事  
は幸いと云ふ事も多きにこれと云ふ事  
つゞく天と被それざるが爲めに新株の熟色開花  
され多一草年の解を以て何くん人を  
幸運と爲るをやうねり又併よき事なり  
二月あり候と云ふ事案時難紀は七月七日乃毎次  
纏腰而とりまほどとあやすけ度えゆきや

アタマノコトハ御事より身の内事  
乃門水口某の隠風むなぐれの歌を三首  
古今集一九ほりの歌也  
年老ひて心化セタノ如きよめにあらゆる

後撰集小抄納之東家  
所引也於此不無少之  
前因記大食

新編撰集より活版

まむかひのわをうへてせみたまめにけなされ

セタノハ松枝

御陽月地一お色。未抵經年。那恨多。最恨明朝  
波車雨。不夜回脚。渡天河。

又 星采石

重惺。波斗柄。故。鷺鳥慢。日精。天。使。鷦鷯  
拂河濱。一冰還。真有寒財。

又

纖女韋牛雙扇開。年。一。及。五。酒。未。言。天。上。

獨。お。り。と。移。勝。人。間。去。不。同。

○今日索縫とくふ事。約十節。記。と。も。く。ひ。前  
氏。内。此。又。七月。七日。又。詔。す。そ。盡。思。承。と。く。今。唐  
病。と。や。す。じ。う。れ。ぬ。日。往。は。は。よ。ま。縫。と。こ。乃。こ。し。ゆ。  
そ。急。日。よ。下。り。く。索。縫。と。く。う。の。盡。と。ま。縫  
人。之。日。事。縫。と。く。人。の。瘧。痛。と。う。れ。え。い  
は。後。た。り。な。り。あ。手。と。く。す。既。史。瘧。の。外。風。之  
累。溼。よ。感。一。肉。微。食。色。恐。よ。傷。れ。て。病。り。ま。之  
則。經。年。夏。傷。れ。暑。秋。る。瘧。瘧。と。方。へ。そ。そ。り。され  
「く。擣。生。セ。ハ。と。の。」。う。う。は。と。あ。う。ん。だ。ひ。若

日索解と食したまひて病根薄ひが一か八  
三日數とまぬるも事ゆくや決してこの世  
生へ世人の人があひお言と仕合へり  
○今夜二星と空すとて胞累とほしに食わせきり  
香氣とくまく華へくに立色の無べし程す中  
多く男女よりは不能あらむといひ歌成これとを歌  
歎へりゆきつ或衣服と驟一書事とさへ事  
はりは年半百年うそへ天年勝寛七年にあり  
しきじふ事根ほよ見えり無事の後次延長又  
此詩序等は詳なり又  
七夕の事と題すを奉ひ熟れぬと被まう

て枕の夢よかくすり勤勵撰集の奇よ  
ち在よみあらうるるの近道をかばれ極くよもよ  
乞巧奠の事筆附色風生化すよ乃て省れられ  
スアレ始々一木草たりてされど婦人女事の  
たゞあらうに此事となくハ行かずく則て後妻  
乃至よ車よハ行く事務衣服とまくに一體  
の圓すとヨリ車とや都達も服中の事とま  
況も接裏禪ともいふても是くも省くに  
全無事よ缺因法師 之

七夕の苦の衣ととてを今がまくにまくほ

激斬吏士七丈乃得身

天子と紙壁を以て物をも蓄數萬卷秋深手小世事  
絶見識未始人間乞巧揚

揚升七夕代清々

寒舍草牛馬乞候頃過故業并金櫂年々乞麌  
人間巧不逢人巧巧寄勿

○今日革丸と合せ馳と坐てトトト四月金玉刀を  
たゞは日中裏と腰せに腰と腰七藏にさり  
又角嵩とあく色繪書寫れやよ重い盡と腰  
あ鑿車カタマ新ハタハタり

十三日二日より今日まで乃ちあるある日廻申れ  
懶磨と拂ひ難い處とあて塵埃とだらま甚す  
へ一九懶磨をとくまく一年に二度一月に一  
よし多懶磨とほくまととととと日立づく天音を  
よしよしの車多まれハ疎懶ありけり月の日より  
よく日をなぐく傍れとくまくひそひそ  
○おのれの御飯とおのれの御酒とおのれの御衣  
うるより酒あうかとおのれ又餐とおのれの御り  
つておのれの御飯とおのれ又餐とおのれの御り  
うちおのれの御飯とおのれの御酒とおのれの御

おかづがうかくのちのめだ。」

○今本世間の人方の讀の本あり承るべく也と號す  
いがまかく駆り立てば愚矣愚矣せむるは居す  
士愚矣居人を駆く駆せがまや佛氏乃後承  
まどひ駆よレ矣禪生乃御靈未悔すと昔先  
駆多より事とあひ人多一之に於焉  
コニシテ御りされハ史籍綱目の中元乃御靈之體と喪也  
ノリ御古今人冠服と思ふ御坐よ其處と望ふ  
楫櫓ノ御と奉そ入聖年ノ又云を送て其處  
乃御と考よ以れとト御坐よウニとあ是ハ也

まちかく車の音がある

十五日 今日と中元と云圍候 蓬左衛門と織女一と本家  
よ餐一 納職小とてゆ  
御事ト御記取リテ 今世七月十五日  
御代度み事御乃が御木前竹物工巧也 今人争以作御圖繋  
此御御果食御目蓮教母畫像御之縁え素美ニ所望ハ今  
事御使ハ  
又五子の吉又母生之御代墓と繪寫リ 今日墓と  
繪一此在今西墓而御能と繪す 日今度義と申る  
たるをこれと云う御事と云ふ事食 本經考其姓は蓋碑と  
云ひて御食と云ふ御果と謂ふねて多りもアリ也  
又此事と云ふ事食御は七月十九日御生と御食  
奉食て墳墓と稱すとゆく云々後居の後よ志之久

かくおほしのまへすめと久くより空に雲人乃  
道すやをもとをせむる氣なり。西道よき行うへ空の人を改  
きく青先づのまく韓魏の服をまつて  
月十日騰五月十日騰五月十日騰  
まく又やし車とひ  
玉一て候はむとがりんとちくい生經内を空に空よ能食と  
きゆく墓而よひく弔。墓前よ焼羅といひ  
生經代を事あらに食とをもぐる事無處行て其生經  
をもぐるにすくい候凡今取事世俗も見て下、承  
きよんに墓よひく弔。葬物多々八九種之御物  
まくは就あらんとさき、とくにありとせばやかせ  
をうみぬきりと見てたゞ、逃るる人矣。

凡宗派は亦多うれしう事一多一中  
また七月十九日孟華事の後まか佛像  
目蓮母と救度主とひそむる本尊と頭をうなぎ老  
翁も書化によどりてあが教中えよまんとせんと生能子  
うゑ竹と柳と蟹と墨の形よさうらく紙邊と筆  
毛筆へこれと竹の上にようけやと付くやうきとれ  
絶えず方圓と方角とをれども筆の腕と筆の筋と  
さりと又筆の筋と筆とがく所て二脚とか  
よか纖毫寫さまこと孟華事とつづく宋版と傳  
て生れとす。一秋の出来事と告うとぞとぞ

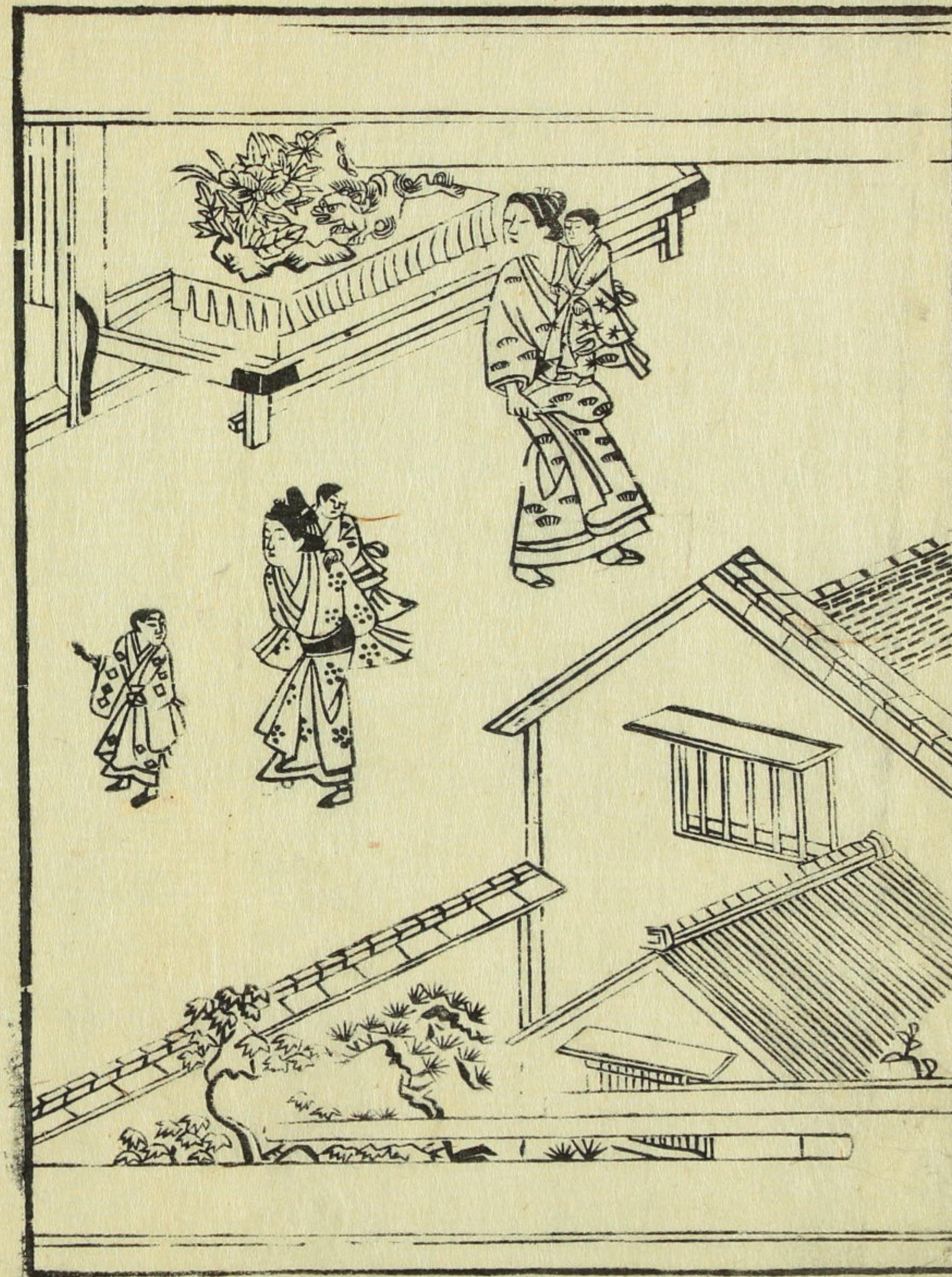
うちの風俗くらやまれにやがれ事一とわくとあく  
源氏目連の事と説教してあはへ孟薦義經  
すこしの書と化して風俗とあるじへや我國  
多く孟薦義の作事とある事一聖武帝の天平  
五年二始より一續日本紀より是べ年中  
ひ事記を代乎よ希大總

さくそくや良秀が總て傳ひて至るがく  
○五難經よりそく七月申元ノ日孟薦義とす一目連  
母鬼道も漏る所なく功徳と経の往還と  
志く食とくとむとむとむとむと世俗たどり度

乃後よまとてとまうてつとめ代祖考の天皇に登り  
極樂世界よまとて事とゆまとて纏思ふ有  
てこれとまつてゆりてあはせ

○毘盧より十七ハ夜また商場又は山のみを知る能  
と能す起工と來てあはせの地をきらへん  
アヤシム事中元不持戒と能すと後極樂院實義行あ  
ゆきもろこしはよ始まり一前年乞家明月死すて  
のよくそり一とくを度地の向一もくへしきともと  
え又能

○又ヒ日世後山海の通流とせ次モろうとまう  
かの山の山名也一中元日他作洞石採魚之也



十六日 四月一日男女三歳の誕生と事とす又やどりと  
女婢のいふにこひてあこうて又母兄をよ慰めする旨  
今朝も夢在波の赤壁に遊し月と雲と秋の夜  
秋三月をとくと月波素月のまゝ八月の長九月  
たと夜を風と素すらむかひてたゞ七月の三晝期  
たり 好事の人へ事城の所とまじひて今夜行  
月と雲波と月事ゆう

晦日 沐浴

は月夜浴冷き衣と風と風浴と浴の事  
すれすれ万葉河平身表氣ととまく風不

感ドヤア敏感の眼傷を癆嗽喘急の病から精  
てこれにて

四月十三日と嘔吐標漆と頭前より氣をとすと標の幕  
とお印とく標標毒年よ次新車と合入月令度義云  
かくあると水多大だハ若  
とすとく標  
ちもくけと取つととすと一と一とあわざとつさす  
又左も右もだらかすと水とひづりやとへと先と五日  
湯と四日と常日志がる是二不當志多めの者別に  
墨入り墨入と元標漆を久ととけハやまく減  
まぢり墨入とあはせらと能がわ

又桶カハク竹筒チクボにてかまゆひびテ玉子トナユ魯ルハ桶入  
板ハタケと石内シロイミクミク、志多大減シタオカゼ、甚松シラスアヘトウキの  
よくへ取蓋ハサフタヒテ常ノリハシマツカシ、モト一妙逃ミタマヒトレハ  
やき火ヤキホ取ハシマツカシ、且シテ紙シテアヘトウキと行ハシマツカシ、  
あくあく詮ザクヒトシマツカシ、又板入ハタケトシマツカシと人ヒトハ桶入  
通ハシマツカシ、美床ミタカ、ニシハ動搖ドウヨウヒテ持ハシマツカシセズ

天氣好時十日書せん竹漆（一三五）  
奴僕より命（一三六）  
紙（一三七）も一、書は先に墨（一三八）よりあ面（一三九）よたと紙（一四〇）にひ  
めりお書（一四一）こへゆき大きさ紙（一四二）のちとひて下（一四三）墨（一四四）とある  
とひて下（一四五）墨（一四六）とある

金紙きんしともあつたりあくまのうふひやまをあつよ  
あぶがまえのうふもくつぎはけんへんとれり  
ちうとくあまうすへそそのと水よへらんとお  
て一やすよ歎たんあ税たみ紙しのとくあまうせんと紙しを包  
樊はん原はらのゆよへ ようちやとたなは附つきかよ取とがさぶる  
らうと細ほそよきりこまきとまさせくすり合あわきと用もち  
がきと付つき、しきらうと、じきはくまま、ゆうにまのぐわらもほ  
ては方ほうちよく守まつは番ばんとうとまつ字じのとまれ打うちとすてられ  
くあきれんうれいとくわざつぎあよ右うへりて左さへき  
と見てつむらうあがまうのとよりかへてすね却けつへ下さ

モモニ逃げて不意にひづひづとあはうす紙  
のむらがとまどひざあきうちつぎ紙とくちうり  
ひろきととけと見とるよもとひすて然と  
ア付合ふとまどひのまきわづよそと自分うち附又  
吹ふうづきりがたうらんとせのがとそり算て  
トマジマの筆などそぞの村へりもとと通に送り  
因みに紙うりあまかと無名胸に書くあまと  
引いたれどよ食へんたのと紙うりとや  
ア義能付合へる解ととまりきどりて紙うりとや  
マよまあま、紙うのがとゆよせとがとそりなまえ

かのくゑに方程とホ一西んもう引うとたれこ  
そーとももくとめあまー紙とぬき地獄示選  
てのあうりころ紙よもと引せてもとて、能  
きう付せ精りよふらきあくと想うげ能て空  
白く後日よかとーりて後又うとまざと二三  
引毎分半一ノ加減うそせてこなよとさりー次  
起ひく後裏よも引かとーじーろーとくと  
ゆよよりてすとまくまくとまくへ和かみろ  
け御丁強へ

立秋の後茹<sup>シテ</sup>蔓<sup>カク</sup>有<sup>カク</sup>蘿<sup>カク</sup>葛<sup>カク</sup>乃<sup>カク</sup>繩<sup>カク</sup>と<sup>カク</sup>歌<sup>カク</sup>一<sup>カク</sup>雲<sup>カク</sup>

よりて、モカシハ菘蔓苦とつてくまけハ齧食なり  
アツムハ月の後まづくへて菘蔓を出す。此を  
ちやく莢(アラヒ)れを根タリ七月初まづくへても菘蔓辛  
菘蔓(アラヒ)菘蔓と同體。よもぐへて莢(アラヒ)れハ根タリ  
宅外(アラヒ)生(アラヒ)く。八月も菘蔓と云  
ハ初(アラヒ)く。モカシトモアラヒ大葱(アラヒ)也。菘蔓(アラヒ)  
トワウチウタヌキ(アラヒ)六根(アラヒ)と云  
ヒ月の末(アラヒ)皮(アラヒ)と根(アラヒ)も活(アラヒ)き櫻(アラヒ)と取(アラヒ)うど去(アラヒ)  
と根(アラヒ)日(アラヒ)え乾(アラヒ)す

金(アラヒ)葉(アラヒ)と食(アラヒ)ひかげ(アラヒ)モトヨマ湯(アラヒ)蟲(アラヒ)入りと寒(アラヒ)す

食(アラヒ)ハ目(アラヒ)と接(アラヒ)ス麻(アラヒ)様(アラヒ)をアラヒ氣(アラヒ)とアラヒ萎(アラヒ)葉  
アラヒハ祚(アラヒ)葉(アラヒ)とアラヒ氣(アラヒ)根(アラヒ)と多く食(アラヒ)ハ人(アラヒ)と傷(アラヒ)  
葉(アラヒ)と食(アラヒ)ハ氣(アラヒ)とアラヒ次(アラヒ)葉(アラヒ)と多く食(アラヒ)ハ暴(アラヒ)瘡(アラヒ)  
孔(アラヒ)を敷(アラヒ)生(アラヒ)薑(アラヒ)と食(アラヒ)ハ櫻(アラヒ)肉(アラヒ)多く食(アラヒ)ハ祚(アラヒ)乳  
と接(アラヒ)ス立(アラヒ)秋(アラヒ)の後(アラヒ)萎(アラヒ)解(アラヒ)及(アラヒ)水(アラヒ)泄(アラヒ)解(アラヒ)と食(アラヒ)ハ  
立(アラヒ)秋(アラヒ)後(アラヒ)十日(アラヒ)瓦(アラヒ)と多(アラヒ)食(アラヒ)ハ  
ち七月(アラヒ)葉(アラヒ)根(アラヒ)を冷(アラヒ)水(アラヒ)と多く食(アラヒ)ハ人(アラヒ)に  
齒(アラヒ)閉(アラヒ)害(アラヒ)有(アラヒ)ニモ後(アラヒ)日(アラヒ)よりて病(アラヒ)と生(アラヒ)ス又七八  
月(アラヒ)乃(アラヒ)漏(アラヒ)水(アラヒ)多(アラヒ)ニモ即(アラヒ)氣(アラヒ)附(アラヒ)生(アラヒ)冷(アラヒ)水(アラヒ)拘(アラヒ)繫(アラヒ)多  
シ多(アラヒ)食(アラヒ)ハ淡(アラヒ)雅(アラヒ)氣(アラヒ)附(アラヒ)水(アラヒ)帰(アラヒ)失(アラヒ)癪(アラヒ)解(アラヒ)

壬子桂月廿日次

七月八日候才一應風毛才二毛毛澤才三毛毛懷才  
大立秋之候才一毛才立秋乃立毛才立毛才立毛才  
始肅才六毛乃登才立毛才立毛才立毛才立毛才  
立秋至立毛才立毛才立毛才立毛才立毛才立毛才  
登立毛才立毛才立毛才立毛才立毛才立毛才立毛才

八月  
宜秋八月の嘉穀故八月乃中之月の嘉穀也  
櫛頭御と朝日とよ。食のちと食膳とよ。立秋  
立秋と嘗月と也と嘗月と也と嘗月と也と嘗月と  
朝日信人絹と云今日たのそと人よぬと通騒さう

事ありて木根少よとくことよりを文よ本後才又  
西種事をあくす世俗の國儀より或假名紀よ建長院  
年号ノリ既より山車行り才ト先ハ田のミトトト  
とお祭ゆる事かくもよのく人なりとへばり才  
セウヤヌ秀明も大國れ文承の祀よせハ年もう前  
詔よ天下に流布せりのきく統て下諭て建長院  
行内事なりとさく御後よ後醍醐院才と爲事と  
て御職通方ニテ多ての事行り一體正因事とす  
え先ヨリもひととを有し男女もよすりけりよす  
やすによ重事とひくせ語ひくは裏端ナリ

内にゆきとあつきうきをもと傳へてうれしまさり  
毛乃タクナリ事のまことにまつちよりたる年  
紀を鶴爾もくへとハ後湯城流へ山邊の河原  
よりくろすむらすや郷は今年かほき草中に  
立候ふうすすす強きことをひしろ難よせう  
てよもとゆきぬとも重い年が次よまく候之  
於にゆきとあたかあ事かくも遊樂くはる  
すとよき又懸せ明り空委曲よどくはるてらの  
あくまあむじのほとまくじとじとじてまく  
片ハギリとおねうそとまくとまくヤード

一はたとまつうじをくはばよはせばよてて服  
宣ふ乃すくまでせとめだくとくうけり  
わせきくこまゆりとくまわらしるたとじ  
らとてたとめあき肉巻のつまみとく所の  
あつうかとこな車はうとまつう又とく月よとこ  
かうとがまかうとこまくわせとこま事まく  
坐車をくまくまくまくまくまくまくまくまく  
とくほとくあれと今もうれしくあくてまく  
まづがまくまく

今事まくにたまくとくとくとくとくとくとく

の物語れ候事より是を取て其事の事へと申す  
不思議へ候事。されど此義式に申ばれ事より是を  
文次第よりは國史事もあらずされば以つて是を  
皆り私へる事一根本の根とす。とぞ一是を  
近世にてこずり候事のう事は極と云ふ事う  
ふくさへ偽書うりんの事能とぞうゆう事  
色をうきりしめぬる事。今い書は引同人ハ考は  
傳の事のミス今ひそ小半よ秋の國額のもの  
とぞよしのふ事のまづやもひとつ手りて是  
うきと、月相腰とたゞす候は乞と脇腰とす

月令度義潛確數事あるに及べて、張へ田穀の新  
なりとがる事れども、是ハ日かれい朝の禮義トモ  
不都セラ事す。

○今日 梅雨より 将軍家より届ケ又 翁家  
より也以能上紙被何ア之事ナシハリ。一つ  
十四日 明夜ハ 深時ヘテモアされば、是も人の月と  
考レ。一深時後、八月十四日也。

銀通子を、其處勝垂。正既初と欲圖叶。遠愁意  
宜先。素明夜。深時未可期。

十五日中秋といふ秋九月九日方々承う。國信

今日、惣家へかくりゆく放生舎とまへじ事、久  
宣第十四代元正天皇ノ御宇安酒ノ年九月二十六  
日向並國紀連ノルニ西因裏トリ流家守候の  
之處ニテハ移室奉<sup>ス</sup>御勝波豆采御軍ヒ引率<sup>ス</sup>  
被廻<sup>ス</sup>ト候<sup>ス</sup>事ア前半<sup>ト</sup>之報<sup>ス</sup>トモ<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>うわ  
候乃ハ元宣<sup>ノ</sup>度<sup>ニ</sup>合氣<sup>ト</sup>多<sup>シ</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レ  
左前生<sup>キ</sup>トテ<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>御<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>ま<sup>と</sup>く<sup>ク</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レハ後國<sup>ノ</sup>  
アラム<sup>シ</sup>御<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>ヒ<sup>シ</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レハ後<sup>ノ</sup>御<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レ  
足<sup>シ</sup>アリ<sup>シ</sup>御<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レハ後<sup>ノ</sup>御<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>人<sup>を</sup>殺<sup>ス</sup>レ

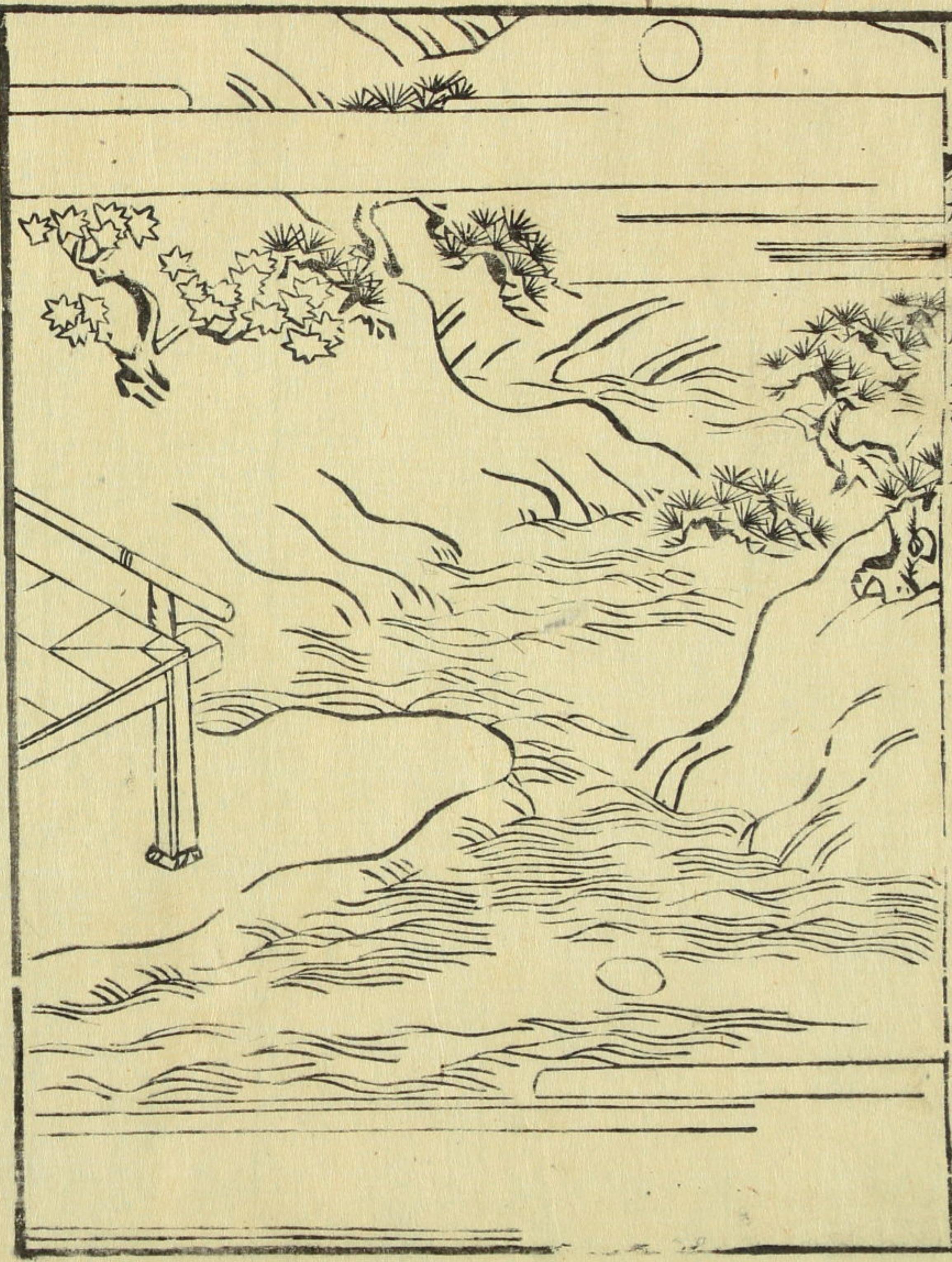
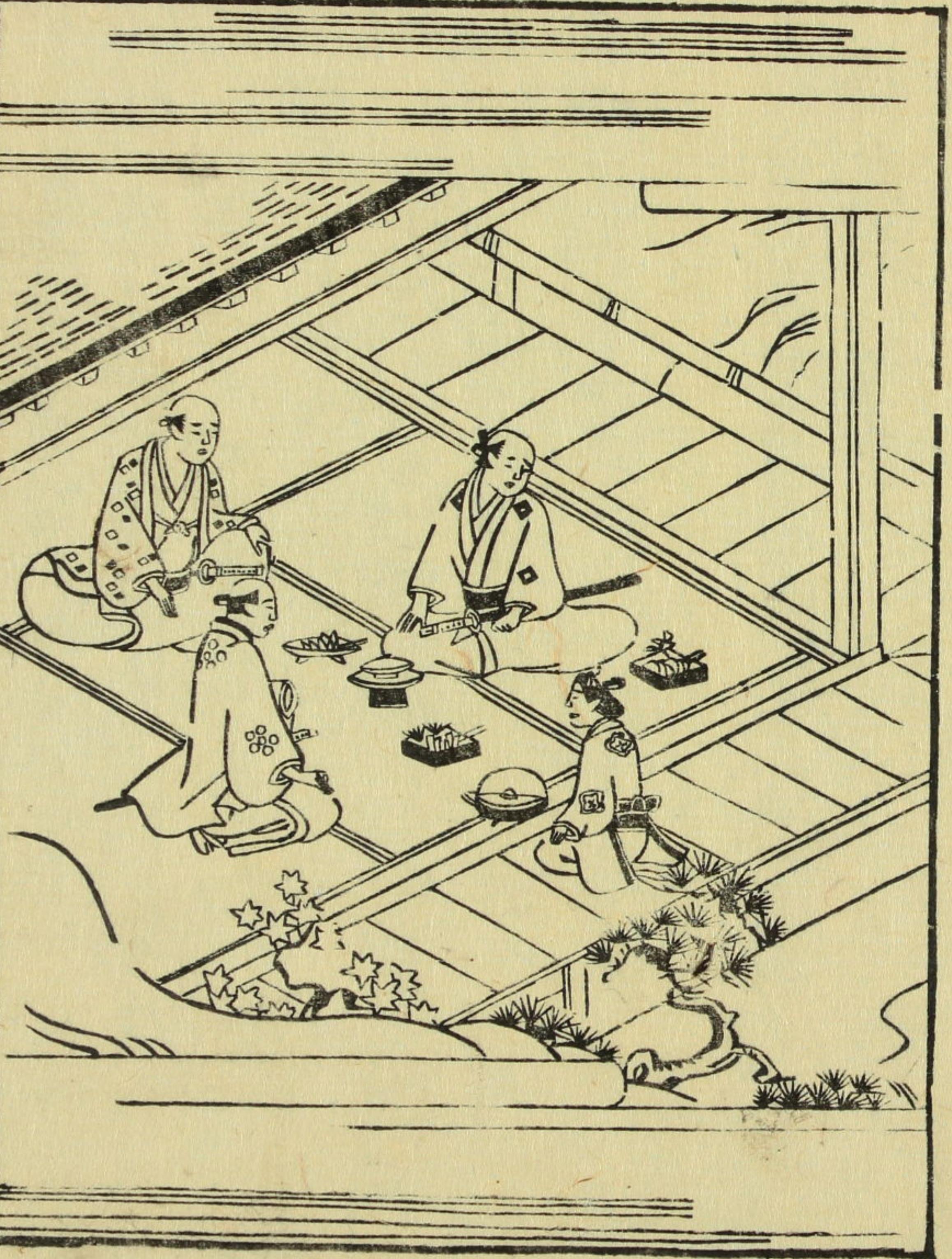
ニヤツカムコトニヒシヒト骨解と繋げてシシヅケの  
骨は伍り月解と號してあとノア又月解を瓦  
等と合して看月金ととひ。月令度数よりす  
歐陽彥。祝月序云月之為祝。祝之祭也。穀大宜  
別蒸重太樂也。蒸月。輕後入散。輕也。宜祝祝之  
於時後夏先冬。月於林季始孟秋十立於初之月  
之仲。祝於天通引之無均取於月數。別饗毫圓。況  
坎壘不滿。大吉無以續。續能相得。再上深界東林。  
入焉。移則骨也。之除治。祝氣也。之清陰。

○素立夏之月。祝云。立夏之日去冰之禮。被毛全氣。

金水性也。立紂分其事。別知五德。同。右國各  
火之金還盡。月固秋更清。萬物皆往之先人。消亡之  
終。立夏之天厚之節也。

新物穫集。一岁運法師。

立夏。水火半也。立夏之日。去冰之月。立夏也。  
立夏。集也。涼也。立夏之日。去冰之月。立夏也。  
立夏。集也。涼也。立夏之日。去冰之月。立夏也。



萬葉集卷五  
三十一

強景安う中一株乃植上

万葉秋定掛玉燈瘦梅者也寒多矣。西河此月  
若す引人自今宵冷眼看

御室魏ノ絶句

御池逐俗月生邪趣此花易天明酒誰引取  
秋江吹添入網臺就曉支

秋山集ウ積木

湯因毛明桂傳序へ折大刀轉に地毫攀桂仰不言  
水疏疑君雪林搏見羽毛此時曉白兔重欲數秋意  
邵康節ハ約よ

一年一度中秋夜。十度中秋九度深。未滿玉須彌  
右宗。夢明仍候。動天心。守重暉。憲情非。深不睡。  
觀財志。深流。古人。緒句。好。何。滿。千里。昔。如今。  
○今夜鑿。桑。と。扇。の。花。多。け。て。多。く。多。  
月令。度。義。よ。乃。そ。そ。ア。又。ソ。く。牡。丹。ト。梅。一。載。乃。事。  
今日。して。ド。一。窮。多。す。宜。く。次。ア。根。ヒ。原。く。藍。ト。  
寒。酒。ヒ。ソ。く。淡。ハ。丸。妙。ナ。リ。

脇日休添

もううう。一。社。日。立。く。三。秋。ノ。後。才。ス。の。成。代。日。土。ハ。

中此多日只一日と用べりと命をうきしん絶處  
左ノ文書佐ヨ八九月十九乃和子多時往復  
きと製して其事を察えさる却處都里よと今事  
り、之をうそつま社有しゆうが取引とりひきすや事無  
能よ秋社あきのやしろの社酒しゃしゅ饗うけてと生なます  
上旬小日と様よう々各處かくしょと  
様よう々乃日考かう妣ひ生なま代だい社やしろと多々たゞ一月望むわ二月じゆ  
より後ご氣き日ひ也や一月じゆ也や二月じゆ也や秋あき也や  
娶くわて日ひ也や金きん腰こしもとひくと一月じゆ也や春はる也や  
乃の事ことよき事こといふ

月の後郊野の起報す

は月家はりへと新穀と來て秋を八月かに變  
うらら親戚と客まへ

此月淫風あり國人多く風よ歎して瘦慘と風也  
乞中玉と有よモ松葉蕭と前一乞中玉と風也  
ちやく桂カエデと有よモ月と有うゆめとすと有う  
萬葉落葉カタハラと有の初前一萬葉カタハラと有うゆめと  
西行シキノウと有うゆめと有うゆめと有うゆめと  
はあく葉落葉カタハラと有うゆめと有うゆめと有うゆめと  
葉落葉カタハラと有うゆめと有うゆめと有うゆめと

あられはま一が一土ヒトされば生れひやううする望  
一け一きもへたかがわひどくひどくととく  
べつれを苗生ヒナてもととばよくとよまが一  
虹豆アマハゼと牧草ヒカル一被れ草ヒカルと生れくモイヒシ紅豆  
たねよりみやせ烈ヒヤク一被れ草ヒカルと生れくモイヒシ紅豆  
てとく一め此シテそれシテ出ハシム又凡ハシム其シテのとを

取收至ハシム

熟ハリたる葉カタハラと脇カミて後蓋ハシムして肉と剥ハスルままで收  
至ハシム一生活リビングと葉カタハラ一坐シテとハ用ハシムて次ハシム去  
「凡ハシム」と取宅ハシムて「有ハシム」と之シテ熟ハリせらうと

うらの性阿

は月草を採りて草木根多ひ八月採  
秋枝葉於津浦下在秋採宜晚事家  
種其本熟也二月乃採る

是月竹とそれへ雖す月令度義より

竹とそれへ不熟となり布引樹狗年不輕法うかみ代波と失  
ふくやまきの經かく羊とあひされハ無く不輕ま  
考美禪乃灰汁子と洗ふりをよ一拂拂より一毛  
吸一毛も出でぬから幹後柄矢箋木刀等と染色  
は月又拂れ禪と收毛ノ一布と拂り紅衫と圓入絹布

と染毛を乞ひそ外用多

八月天氣微冷なり多く生果ト食之から次生蒜繩接  
生蜜餞子蟹と食ひ少からず又蘿菜と食ひ少くを忌  
度義より重及七藏よりもくじ爲方治根乃  
瀧泉と称事あり人をして療脚歎と號す  
八月の太候才一箇月才二候也才三箇月醫  
齋太白鴉乃三候あり才四箇月醫根才五箇  
月醫登才六箇月才六箇月醫根才七箇月  
醫登才九箇月才八箇月醫根才十箇月

割衣五十割月令度義

九月

新義八九月の事。南ハ九月  
蘇月 樽とお酒と云。○九月

中九月

朝日今日より八月十五日  
正月十五日と並んで

八月沐湯

おまかせいたしゆぢあらすじひもく  
けぬむか  
のうへ今日たゞ今小野川おのがわ御観眺みはなめりす  
都代民帝みやこ家いえの内うち  
誠まことに登のぼりておわらおわらて  
在あつすとすと高たか魯るをまつす

續集書簡記より多く海南島の植桑とひよこの貿易の筋  
不況をえりて久々に見難いとあつて甚だ暮房植桑  
がたりとせんと今茲九月九日海賊ありよ常大主  
緯臺とあひて中に桑葉とよき被りてわきぬ  
かようて萬石とのやまと此多大濟すと植桑され  
言と竹て九月よりそぞくせんせんに  
をもあつてあゆめ艱毅半生もとく里

至りてち房これと争ふこれ歎う命よりわくや  
ソリ世の人九日より毎々山よむと薦るとの事  
歸人菜黃囊と若きもは前とがへは還き遅れあ  
猪母<sup>ミツメ</sup>九日菜黃と佩ひきのうがく薦<sup>アシタマ</sup>のじ薦<sup>アシタマ</sup>  
費<sup>ヒツ</sup>房極<sup>ヒツカニ</sup>家<sup>カニ</sup>と遊<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>とくられおゆ<sup>ハシメテ</sup>されま  
西京<sup>ヒツカニ</sup>猪母<sup>ミツメ</sup>又<sup>ヒツメ</sup>史<sup>ヒツメ</sup>人<sup>ヒツメ</sup>御<sup>ミササギ</sup>賈<sup>ヒツメ</sup>保<sup>ヒツメ</sup>蘭<sup>ヒツメ</sup>あやめに<sup>ハシメテ</sup>九月九日蓬<sup>ヒツメ</sup>得<sup>ヒツメ</sup>  
と食<sup>ハシメテ</sup>薦<sup>アシタマ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>のむ<sup>ハシメテ</sup>すれい今<sup>ハシメテ</sup>あまう<sup>ハシメテ</sup>せはす<sup>ハシメテ</sup>下<sup>ハシメテ</sup>も<sup>ハシメテ</sup>とく<sup>ハシメテ</sup>次<sup>ハシメテ</sup>とく<sup>ハシメテ</sup>三<sup>ハシメテ</sup>八<sup>ハシメテ</sup>又<sup>ハシメテ</sup>月令<sup>ヒツメ</sup>度<sup>ヒツメ</sup>義<sup>ヒツメ</sup>又<sup>ヒツメ</sup>使<sup>ヒツメ</sup>書<sup>ヒツメ</sup>  
下<sup>ハシメテ</sup>は<sup>ハシメテ</sup>も<sup>ハシメテ</sup>とく<sup>ハシメテ</sup>極<sup>ヒツカニ</sup>家<sup>カニ</sup>始<sup>ヒツメ</sup>ト<sup>ハシメテ</sup>ナリ  
と引<sup>ハシメテ</sup>そり<sup>ハシメテ</sup>菜黃<sup>ヒツメ</sup>と辟邪<sup>ヒツメ</sup>翁<sup>ヒツメ</sup>と薦<sup>アシタマ</sup>  
客<sup>ヒツメ</sup>にあは九日ば二<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>か<sup>ハシメテ</sup>て酒<sup>ヒツメ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>卮<sup>ヒツメ</sup>消<sup>ハシメテ</sup>  
を<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>あん<sup>ハシメテ</sup>薦<sup>アシタマ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>是<sup>ハシメテ</sup>後<sup>ハシメテ</sup>後<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>す<sup>ハシメテ</sup>た<sup>ハシメテ</sup>手<sup>ハシメテ</sup>  
周<sup>ハシメテ</sup>月<sup>ハシメテ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>日<sup>ハシメテ</sup>律<sup>ヒツメ</sup>等<sup>ヒツメ</sup>御<sup>ミササギ</sup>來<sup>ハシメテ</sup>り<sup>ハシメテ</sup>數<sup>ヒツメ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>

召<sup>ハシメテ</sup>す俗<sup>ヒツメ</sup>に<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>離<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>尚<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>菜黃<sup>ヒツメ</sup>房<sup>ヒツメ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>お<sup>ハシメテ</sup>て<sup>ハシメテ</sup>止<sup>ハシメテ</sup>  
捕<sup>ハシメテ</sup>む<sup>ハシメテ</sup>毛<sup>ヒツメ</sup>氣<sup>ヒツメ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>辟<sup>ハシメテ</sup>除<sup>ハシメテ</sup>て<sup>ハシメテ</sup>初<sup>ハシメテ</sup>寒<sup>ヒツメ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>あ<sup>ハシメテ</sup>せ<sup>ハシメテ</sup>ぐ<sup>ハシメテ</sup>ま<sup>ハシメテ</sup>キ<sup>ハシメテ</sup>  
と<sup>ハシメテ</sup>そ<sup>ハシメテ</sup>毛<sup>ヒツメ</sup>が<sup>ハシメテ</sup>ん<sup>ハシメテ</sup>西<sup>ヒツメ</sup>從<sup>ハシメテ</sup>た<sup>ハシメテ</sup>り<sup>ハシメテ</sup>て<sup>ハシメテ</sup>不<sup>ハシメテ</sup>ス<sup>ハシメテ</sup>今<sup>ハシメテ</sup>日<sup>ハシメテ</sup>薦<sup>アシタマ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>あ<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>が<sup>ハシメテ</sup>が<sup>ハシメテ</sup>  
薦<sup>アシタマ</sup>が<sup>ハシメテ</sup>も<sup>ハシメテ</sup>至<sup>ハシメテ</sup>農<sup>ヒツメ</sup>法<sup>ヒツメ</sup>萬<sup>ヒツメ</sup>也<sup>ハシメテ</sup>舒<sup>ヒツメ</sup>財<sup>ヒツメ</sup>花<sup>ヒツメ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>薦<sup>アシタマ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>  
其<sup>ヒツメ</sup>よ<sup>ハシメテ</sup>參<sup>ヒツメ</sup>來<sup>ハシメテ</sup>に<sup>ハシメテ</sup>す<sup>ハシメテ</sup>つ<sup>ハシメテ</sup>そ<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>確<sup>ハシメテ</sup>一<sup>ハシメテ</sup>來<sup>ハシメテ</sup>年<sup>ハシメテ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>月<sup>ハシメテ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>日<sup>ハシメテ</sup>  
御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>而<sup>ハシメテ</sup>あ<sup>ハシメテ</sup>して<sup>ハシメテ</sup>これ<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>總<sup>ハシメテ</sup>よ<sup>ハシメテ</sup>これ<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>薦<sup>アシタマ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>之<sup>ヒツメ</sup>は<sup>ハシメテ</sup>  
西<sup>ヒツメ</sup>京<sup>ヒツメ</sup>猪<sup>ミツメ</sup>又<sup>ヒツメ</sup>史<sup>ヒツメ</sup>人<sup>ヒツメ</sup>御<sup>ミササギ</sup>來<sup>ハシメテ</sup>り<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>

○立<sup>ハシメテ</sup>農<sup>ヒツメ</sup>也<sup>ハシメテ</sup>や<sup>ハシメテ</sup>人<sup>ヒツメ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>薄<sup>ヒツメ</sup>く<sup>ハシメテ</sup>上<sup>ヒツメ</sup>衣<sup>ヒツメ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>纏<sup>ヒツメ</sup>奉<sup>ヒツメ</sup>ヒタ<sup>ヒツメ</sup>身<sup>ヒツメ</sup>陽<sup>ヒツメ</sup>へ<sup>ハシメテ</sup>中<sup>ヒツメ</sup>新<sup>ヒツメ</sup>よ<sup>ハシメテ</sup>も<sup>ハシメテ</sup>襄<sup>ヒツメ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>る<sup>ハシメテ</sup>あ<sup>ハシメテ</sup>信<sup>ヒツメ</sup>吉<sup>ヒツメ</sup>を<sup>ハシメテ</sup>り<sup>ハシメテ</sup>之<sup>ヒツメ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>月<sup>ハシメテ</sup>九<sup>ハシメテ</sup>日<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>御<sup>ミササギ</sup>

すりとせあふて乃へてうけ候  
乃きとほどとまつて、おひよ後<sup>アフタ</sup>の代義  
とあく處<sup>カタ</sup>は居<sup>リ</sup>る。居<sup>リ</sup>る。極<sup>シ</sup>る。もととく離<sup>ハ</sup>  
てじゆくすその姫修<sup>メイヒ</sup>みれいに  
縁平裁集<sup>ヨハラノシテ</sup>院引<sup>ス</sup>典俗<sup>ハ</sup>  
ひま代<sup>ハ</sup>株<sup>シ</sup>重<sup>シ</sup>て九<sup>ト</sup>きに<sup>ハ</sup>代<sup>マ</sup>てかくれ<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>うす  
金座<sup>ハ</sup>とてひゆ  
お月やまよと西<sup>シ</sup>東<sup>ヒ</sup>代<sup>ハ</sup>たの様<sup>ハ</sup>万<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>せん<sup>シ</sup>人<sup>ハ</sup>  
張<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>變<sup>シ</sup>く<sup>ハ</sup>空<sup>ハ</sup>跡<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>候<sup>ハ</sup>  
一刀<sup>ハ</sup>萬<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>只<sup>ハ</sup>自<sup>ハ</sup>羞<sup>ハ</sup>。萬<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>髮<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>禁<sup>ハ</sup>秋<sup>ハ</sup>恨<sup>ハ</sup>爲<sup>ハ</sup>愁<sup>ハ</sup>



相手房月言著玉

鳥納帽獨倚西風滿眼愁

趙約月九日後

屐齒磈翻印淺波  
江月風露帽舞斜西風滿月  
儀英繁林夕色紅垂幕

杜牧九日醉山中之詩小

江涵秋影落初晴寒窓機垂二聲擊微  
穿石筍葉爭頻插滿頭懷他機酒可醸佳節  
不用愁心怨落暉古今風物如牛山何必

猶沾衣

○今日羞之犯也及暮而歸而嘯甘苦而醉而夢

勇也之九日上廬——總在九日——與今虞義之方  
十月圓係今日——り是衣——もく二月晦日——終終  
レレ——すりそきまろ禮式——がむくす

十二日僂候今宵月紙畫——事——中秋也——吉田  
善始終——八月廿九月十三日ハ婁家——  
清明十九日——月と輕と良有——すやる——  
之をよ祝也れか否——ともくは只——半齋と深く考へ  
又月分大小あり——からづら有——齋とすうて——す元秋  
六月とまだそく聞——中林をりうこう——月と考へ  
分付——せり我國ニス九月十三日と用く月孤美

を廻る八月より流す十九日暮乃日と書しめ候が昂に  
月をさむらフといひ又正月を滿月とくく其義と取  
て一九日と用ひ乍り下ともも代月と號すと云ふ  
シテ近頃は正月の歌とハ凡て元宵たゞノニ長乃  
月を書セ一續くこれより又其事を寧府かく仙  
乃延う其事報色向雲霞と題する所也と一説  
云九月十三夜乃作此より其後集まゝれ  
月半を祝ひ其事と云ひますと附さんと云ふ事  
を此地が多也其事又は年賀の月と云て仍て古文  
集めの事と云ふ事也此氏抱總知勇の事より九月から持

夕未ちれ大祭小聖よりうす月西より十三日月  
のやまと前山寺訪り者めしもとアハ心もあらわ  
テノリ地を下りてあり木の枝をもじむる月と云  
サムトモヤ 老人乃ハちく勝乃十二月也乃は  
十ニ有月と申する所あり是より後世もさかへゆく  
今月と  
孰すモヤ

金魚集は太宰大弐也亥九月十三日月と傳ふ  
くが毛方記述と凡ての月と付ふる事人多き  
平載集アリ殊人不知

物代月ちくに仄々と経てアリキニ多事也

鷹集外丸之書文

の林月ひせうといたねをせんをくにけう  
翁至忠通号桂桂九月十三夜數月待よ

用脚寂月於隙隱屬家被望回極其深之聲  
漢雪纺薄家甚經濶玉承昇十三萬紙勝於故  
而年完不費今少相傳前野圓音見清明燈會價半金

晦日沐浴

は月部遊て血脉と計之

上旬小坐と下旬に大坐と前へ一章是秋うな  
立變と氣附の氣とくはと月令度義より  
始肥饒する所とくすくゆきは甚蕃農夫之が

十月以後十二月初まぐちくへ

瓦茅とこかく九月以あユ取りたへ日に乾へ十月以後  
株ものへ陰乾してトトと乾すと刀をそり立て  
立耕とう茅へ日に乾へ冬もとく茅へ漬干す  
立つて茎葉落葉有荆芥らモホとハ久しく烈日  
小わせハ氣うもくならかくさんとく付らへ枝て  
陰え平へ

は月牡丹芍藥及竹結果木とト一株と月  
令度義よりそつて農政全書よどく元黙木と  
ゆく小坐を九月乃や代後樹のすづりとありて繩と

庚午年夏之月  
一  
郭江雲

は月梨栗と牧童<sup>トモ</sup>一月今度叢<sup>ハシタカ</sup>へゆきへてお後<sup>アフタ</sup>よ栗と  
取<sup>ヒ</sup>て事<sup>モノ</sup>の内<sup>ナカニ</sup>よ入<sup>ス</sup>まうくものと去<sup>ル</sup>日<sup>ヒ</sup>おや<sup>リ</sup>油<sup>オイ</sup>と  
妙<sup>ミソツ</sup>く冷<sup>ク</sup>い新<sup>ハヤシ</sup>臺<sup>タケ</sup>を入<sup>ス</sup>油<sup>オイ</sup>栗<sup>ハシタカ</sup>一栗<sup>ハシタカ</sup>隨<sup>シテ</sup>よ油<sup>オイ</sup>一壺<sup>ハシタカ</sup>  
コ<sup>ト</sup>た<sup>シ</sup>一二石<sup>シキ</sup>入<sup>ス</sup>多<sup>ハシタカ</sup>きり竹<sup>チク</sup>着<sup>ハシタカ</sup>とゆ<sup>ハシタカ</sup>いと  
と竹<sup>チク</sup>代<sup>ハシタカ</sup>ホ<sup>ト</sup>ろ<sup>ハシタカ</sup>乃<sup>ハシタカ</sup>ど<sup>ハシタカ</sup>が<sup>ハシタカ</sup>りわ<sup>ハシタカ</sup>か<sup>ハシタカ</sup>く<sup>ハシタカ</sup>と<sup>ハシタカ</sup>せ<sup>ハシタカ</sup>て<sup>ハシタカ</sup>も<sup>ハシタカ</sup>れ  
いさ<sup>ハシタカ</sup>ち<sup>ハシタカ</sup>娘<sup>ハシタカ</sup>一太<sup>ハシタカ</sup>れ<sup>ハシタカ</sup>臺<sup>タケ</sup>と<sup>ハシタカ</sup>うつむ<sup>ハシタカ</sup>き<sup>ハシタカ</sup>より酒<sup>サケ</sup>手<sup>ハシタカ</sup>よ<sup>ハシタカ</sup>ち<sup>ハシタカ</sup>、  
づくら<sup>ハシタカ</sup>あ<sup>ハシタカ</sup>れ<sup>ハシタカ</sup>又<sup>ハシタカ</sup>燈<sup>ラン</sup>火<sup>ハシタカ</sup>一<sup>ハシタカ</sup>夜<sup>ハシタカ</sup>漫<sup>ハシタカ</sup>一<sup>ハシタカ</sup>夜<sup>ハシタカ</sup>漫<sup>ハシタカ</sup>  
旅<sup>ハシタカ</sup>麻<sup>ハシタカ</sup>と<sup>ハシタカ</sup>拌<sup>ハシタカ</sup>せ<sup>ハシタカ</sup>入<sup>ス</sup>金<sup>ハシタカ</sup>一<sup>ハシタカ</sup>と<sup>ハシタカ</sup>又<sup>ハシタカ</sup>財<sup>ハシタカ</sup>出<sup>ハシタカ</sup>中<sup>ハシタカ</sup>の<sup>ハシタカ</sup>登<sup>ハシタカ</sup>の

江戸の生栗と二月目より引渡能考と又月日  
毒よ牧口とそり玉ハ歩くつて繋がり  
又大栗と生糸と肝一玉より栗乃革生毛り下至  
やさきとあて毒入不自らもすらかとれ毒と  
用毛中一栗代物下がふと一あけ毒の口  
小ためさうとゆすり口の方と味よ付毒一个茅  
生せず久しくてゆりあり又生と毒入全  
因ようへ毛をもくもへ  
ば比宋穀と來物へ一用多  
生月量と食ひきれ痼疾とがちや毒と人へ被と

本末、有此言矣。不以

傍<sup>アキ</sup>に身<sup>アヒ</sup>を換<sup>スル</sup>蘇<sup>ミ</sup>と食<sup>スル</sup>火船<sup>アヒツボウ</sup>と食<sup>スル</sup>かま<sup>シ</sup>誰<sup>ト</sup>  
多く食<sup>ス</sup>うは大肉<sup>アヒ</sup>と人<sup>ノ</sup>人の<sup>アヒ</sup>事<sup>アヒ</sup>と傷<sup>アヒ</sup>生<sup>ス</sup>の<sup>アヒ</sup>  
と當<sup>アヒ</sup>て、病疾<sup>アヒ</sup>と謂<sup>ス</sup>。一月令度<sup>アヒ</sup>養<sup>ス</sup>。  
九月の<sup>アヒ</sup>候<sup>ス</sup>。一鷹<sup>アヒ</sup>厚<sup>アヒ</sup>東<sup>アヒ</sup>賓<sup>アヒ</sup>。中<sup>アヒ</sup>二雀<sup>アヒ</sup>八<sup>アヒ</sup>大<sup>アヒ</sup>跡<sup>アヒ</sup>。而<sup>アヒ</sup>蛤<sup>アヒ</sup>  
三<sup>アヒ</sup>氣<sup>アヒ</sup>育<sup>ス</sup>。萬<sup>アヒ</sup>禽<sup>アヒ</sup>。大<sup>アヒ</sup>寒<sup>アヒ</sup>。而<sup>アヒ</sup>蟲<sup>アヒ</sup>乃<sup>アヒ</sup>三<sup>アヒ</sup>候<sup>ス</sup>。而<sup>アヒ</sup>四<sup>アヒ</sup>豺<sup>アヒ</sup>乃<sup>アヒ</sup>繁<sup>ス</sup>。  
中<sup>アヒ</sup>五<sup>アヒ</sup>芳<sup>アヒ</sup>。而<sup>アヒ</sup>萬<sup>アヒ</sup>禽<sup>アヒ</sup>。中<sup>アヒ</sup>六<sup>アヒ</sup>蟻<sup>アヒ</sup>。而<sup>アヒ</sup>蟲<sup>アヒ</sup>感<sup>ス</sup>。而<sup>アヒ</sup>七<sup>アヒ</sup>候<sup>ス</sup>。而<sup>アヒ</sup>八<sup>アヒ</sup>柔<sup>アヒ</sup>。而<sup>アヒ</sup>萬<sup>アヒ</sup>蟲<sup>アヒ</sup>。  
立朝<sup>アヒ</sup>五十分辰<sup>アヒ</sup>立十<sup>アヒ</sup>四刻<sup>アヒ</sup>十分<sup>アヒ</sup>。日全<sup>アヒ</sup>晦<sup>アヒ</sup>。

白香山集卷之五

卷之三

卷之三

